

KONAN UNIVERSITY

# 地球環境問題解決のための鍵：内なるエネルギーの開発

著者	中丸 寛信
雑誌名	甲南経営研究
巻	52
号	1
ページ	89-114
発行年	2011-07-30
URL	<a href="http://doi.org/10.14990/00002040">http://doi.org/10.14990/00002040</a>

# 地球環境問題解決のための鍵

——内なるエネルギーの開発——

中 丸 寛 信

甲南経営研究 第52巻 第1号 抜刷

平成23年7月

# 地球環境問題解決のための鍵

——内なるエネルギーの開発——

中 丸 寛 信

## Ⅰ は じ め に

今日「世界が必要とする資源（穀物・飼料・木材・魚および都市部の土地）を提供し、二酸化炭素の排出を吸収するために必要な土地の面積」を示す「エコロジカル・フットプリント」<sup>(1)</sup>という指標がつくられているが、それによれば、2003年にはすでに人間は地球1.25個分の資源を使っているといわれている。<sup>(2)</sup>

また、地球環境問題に関して精力的に研究し、多くの著作を著わし世界各国で講演もしているアースポリシー研究所・所長であるレスター・ブラウンは、著作『プラン B 3.0』の中で、今日「世界は急速に変化している。2年前に『プラン B 2.0』を発表したとき、氷の融解に関するデータは懸念され

---

(1) Wackernagle, M. et al. (1999) “National Natural Capital Accounting with the Ecological Footprint Concept”, *Ecological Economics* 29, pp. 375-390. Wackernagle, M. et al. (2002) “Tracking the Ecological Overshoot of the Human Economy”, *Proceedings of the Academy of Science* 99, No. 14, Washington, DC, pp. 9266-9271. また、エコロジカル・フットプリントとは、「人間社会が自らの消費する資源を生産し、既存技術のもとで廃棄物を吸収するのに必要な土地と水域」(Worldwatch Institute (2007), *Vital Signs* 2007, W. W. Norton, New York (ワールドウォッチ研究所『地球環境データブック2007-08』ワールドウォッチジャパン, 2007年, 66頁)とも表現されている。

(2) *Ibid* (同上書, 66頁)。なおその出典は, Global Footprint Network (2006), *National Footprint and Biocapacity Accounts*, note 23, である。

地球環境問題解決のための鍵（中丸寛信）

るものだったが、いまでは初期の予測を大きく上回る、その早さにいささか戦慄すら覚える。2年前、破綻しつつある国家が少なからず存在することは知っていた。だが、いまでは、毎年、その数が増えている。『破綻しつつある国家』は『破綻しつつある人類文明』の初期兆候である。……今後予測されている『世界の石油生産量の減少』『地球温暖化によるストレス』『食料価格の上昇』など、新たな問題のいくつかは、強い国家でさえも、破綻に追い<sup>(3)</sup>やりかねない」と記している。

さらに、過日の3月11日午後2時46分には東日本大震災が勃発し、日本は未曾有の災害に見舞われた。福島原子力発電所から放出される放射能汚染は、どれほど多くの痛みを現在・未来に残していくかはかり知れない。

様々な問題が押し寄せている今日、それらを解決するための鍵はないのであろうか。そのような問題意識のもとに、本論文では、著名な論者の主張を踏まえながら、その鍵について若干考察してみたい。

## II これまでの地球環境問題への対応

地球環境問題は、いまや多くの人々によって認識されてきている。また、いうまでもなくそれらに対する行政、企業、市民などによる取り組みもなされてきている。それらは、技術的アプローチ、環境法、環境マネジメントな

---

(3) Brown, L. R. (2008) *PLAN B 3.0*, New York: W. W. Norton & Company, pp. xi-xii (レスター・ブラウン著、織田創樹監訳『プラン B 3.0』ワールドウォッチジャパン、2008年、v-vii頁)。

なお、ブラウンは、エコ・エコノミーを早急に構築することをめざし、Brown, L. R. (2001) *Eco-Economy*, W. W. Norton & Company, (レスター・ブラウン著、福岡克也監訳『エコ・エコノミー』家の光協会、2002年)、Brown, L. R. (2003) *PLAN B*, W. W. Norton & Company (レスター・ブラウン著、北城格悟太郎監訳『プラン B』ワールドウォッチジャパン、2003年)、Brown, L. R. (2006) *PLAN B 2.0*, W. W. Norton & Company (レスター・ブラウン著、寺島実郎監訳『プラン B 2.0』ワールドウォッチジャパン、2006年)などを著している。

どの強化策によってなされてきた。しかし、地球環境問題はますます深刻化しているとすれば、それらがどのような基本的立場に基づいてなされてきたのかを知る必要がある。そのためには、M.オリョーダンによって分類された「環境と開発に関する4つの基本的立場」(図表1)が参考になる。

図表1 環境と開発に関する4つの基本的立場

技術中心主義— (technocentrism)	A. 技術楽観主義 (optimism) 人間の能力と技術進歩は無限とし、自由主義経済を信奉し、環境問題も市場メカニズムに委ねて解決し得るとする。 〔ジュリアン・サイモン、ハーマン・カーン “先ず開発を然る後に保全を”〕
	B. 調和型開発主義 (accomodation) 適切な環境管理の下に開発と環境保全の両立を目指す。 〔“環境管理型対応” → “社会的公平性” への危惧〕
自然中心主義— (ecocentrism)	C. 地域社会主義 (communalism) 適正技術とローカル資源に基づく小規模開発を是とする。 〔シューマッハー “Small is beautiful” → “環境保護派”〕
	D. ガイア主義 (gaianism) 自然生態系の保全、持続可能性の原則を絶対視し、これをあらゆる人間活動の規範とする。 〔自然、平和、反体制 → “緑の党”〕

資料：O’Riordan, T. M. (1984) “What Does Sustainability Really Mean?”.

出所：加藤久和「持続可能な開発論の系譜」大来佐武郎監修『地球環境と経済』中央法規、1990年、24頁。

それによると、まず立場を大きく2つに分ければ技術中心主義と自然中心主義がある。さらに前者の技術中心主義には「技術楽観主義」(人間の能力と技術進歩は無限とし、自由主義経済を信奉し、環境問題も市場メカニズムに委ねて解決し得るとする)と「調和型開発主義」(適切な環境管理の下に開発と環境保全の両立を目指す)がある。後者の自然中心主義としては「地

地球環境問題解決のための鍵（中丸寛信）

域社会主義」（適正技術とローカル資源に基づく小規模開発を是とする）と「ガイア主義」（自然生態系の保全，持続可能性の原則を絶対視し，これをあらゆる人間活動の規範とする）がある。

さらに，技術楽観主義は豊穡主義者（Cornucopians），調和型開発主義は環境管理者（Environmental managers），地域社会主義は自己信頼のソフトテクノロジスト（Self-reliance soft technologists），ガイア主義はディープ・エコロジスト（Deep ecologists）<sup>(4)</sup>に対応した考え方とされている。

環境と開発に関する4つの立場をもとに今日の状況をみると，技術楽観主義から調和型開発主義に移行しているように見うけられる。今日，工業先進国は，環境法の制定，環境税の導入，課徴金や補助金制度の導入など様々な対策を講じている。また，地球温暖化防止条約などの国際的取り決めも行ってきた。企業レベルでは，環境憲章や環境行動指針・計画を策定し，それに基づいた環境対策に取り組んでいる。さらに，環境マネジメントシステムの国際規格であるISO14000シリーズが制定され，それに対する対応も<sup>(5)</sup>なされてきている。また，自然の循環パターンをモデルとしてビジネスに生かそうとするゼロ・エミッション構想によって，廃棄物をゼロにする生産システムづくりも行われている<sup>(6)</sup>。市民レベルでも，ごみの分別リサイクルなどをはじめとした活動も盛んになっている。しかし，今日の状況をみると，

---

(4) O'Riordan, T. (1981) *Environmentalism*, Pion, p. 376. ここでは，アルネ・ネス著，齊藤直輔，開龍美訳『ディープ・エコロジーとは何か』文化書房博文社，1997年，26-28頁参照。その内容は，中丸寛信『地球環境と企業革新』千倉書房，2002年，21-22頁参照。

(5) 吉澤正，福島哲郎編著『企業における環境マネジメント』日科技連，1996年；野口聡『環境管理と企業』化学工業日報社，1995年；平林良人，笹徹『入門ISO14000』日科技連，1996年など参照。

(6) Capra, F. and Pauli, G. (eds.) (1995) *Steering Toward Sustainability*, The United Nations University Press (フリッチョフ・カブラ，グンター・パウリ編，赤池学監訳『ゼロ・エミッション』ダイヤモンド社，1996年)；三橋規宏『ゼロエミッションと日本経済』岩波書店，1997年など参照。

それだけでは決して環境問題は解決されないことが明らかになりつつある。

それは、技術中心主義である技術楽観主義や調和型開発主義には、人間の都合の良ように自然を変えよう、そのために技術を生かそうという基本的態度が見られるからであろう。さらにそれらが、「地球環境問題は自然環境の問題である」と認識し、環境問題だけに対処しようとする立場であるからといえよう。今日の対応をみると、目の前に現れた問題、たとえば地球温暖化、森林破壊、海洋汚染、廃棄物汚染、ダイオキシン、環境ホルモンなど環境問題として顕在化してきた多くの問題に対症療法的に対処しようとしており、それを生み出している原因を発見し、その根を変革することにアプローチしようとしていないと思われる。

そこで今後、自然中心主義である地域社会主義やガイア主義に移行すること、それに基づく新しい経済を構築することが求められているといえよう。それらには、自然のエコロジーに人間が近づき問題を解決していこうとの姿勢が見られるからである。しかし、レスター・ブラウンによると、「新しい経済を構築する必要性が広く認識されておらず、そうした経済の構想もまとまっていない<sup>(7)</sup>」。そこで彼は著作『プラン B 2.0』の目的は、「新しい経済（エコ・エコノミーとよぶ）の構築について説得力のある主張を展開し、このエコ・エコノミーの詳細な構想を明らかにし、現状を踏まえた上で、実現に向けた道筋を示すことである<sup>(8)</sup>」と記している。

また、ガイア主義は、動物、植物のみならず地球も一つの生命体であることを主張し、自然への回帰、自然との一体感をめざしている<sup>(9)</sup>。もしも本当に

---

(7) Brown, L. R. (2006) *PLAN B 2.0*, p.ix (レスター・ブラウン著『プラン B 2.0』v 頁).

(8) *Ibid.*, p.ix (同上書, v 頁).

(9) Lovelock, J. E. (1979) *Gaia: A new look at life on Earth*, Oxford University Press (J. E. ラヴロック著, 星川 淳訳『地球生命圏：ガイアの科学』工作舎, 1984年); Lovelock, J. E. (1988) *The Ages Of Gaia*, The Commonwealth Fund Book Program of

地球環境問題解決のための鍵（中丸寛信）

私たちが自然との一体感を感じられるようになれば、自ずから環境との共存を志向するようになり、環境問題は解決されていくと思われる。

### Ⅲ これからの方向性 —人間の内なるエネルギーの開発—

レスター・ブラウンは、『『あれをしなくては』『これをしなくては』』ということはわかっており、リサイクルや野生動物の保護も必要であることもわかっている人は多い。しかし、今求められている変革は、それ以上にもっと根底からひっくり返すような変革だ。地球上で最も知的に進化した種であるわれわれが、これほどはっきりした科学的なデータをたくさん持ちながら、まだ十分な行動をとれずにいるのはなぜなのだろう？」と問いかけ、今日「すべきこと」と「実際の行動」の間のギャップは広がる一方であると記している。<sup>(10)</sup> それらを一致させていくためには、私たち1人ひとりの内側の心（意識）に目を向けていかなければならない。私たち1人ひとりの心が「実際の行動」に表れ、その総和が社会・世界の現実を生んでいくからである。

その意味からも、地球環境問題解決のためにこれから私たちが向かうべき方向は、1人ひとりの内なるエネルギーの開発にあるのではないかと思われる。それについての著名な論者の主張を続いてみてみよう。

---

Memorial Sloan-Kettering Cancer Center (J. E. ラヴロック著、星川 淳訳『ガイアの時代』工作舎、1989年) 参照。ここでは、Capra, F. and Pauli, G. (eds.), *op. cit.*; N. マイアーズ著、福島範昌訳『よみがえる企業：ガイアの創造』たちばな出版、1999年なども参照。なお、ここでの論点の詳細な記述は、中丸寛信『地球環境と企業革新』第10章参照。

(10) レスター・R・ブラウン著、枝廣淳子訳『エコ経済革命』たちばな出版、1998年、52頁。

(11) 同上書、55頁。



## 1. アウレリオ・ベッチェイ

ローマ・クラブ<sup>(12)</sup>の創始者であり、フィアット社やオリベッティ社の重役で実業家としても知られているアウレリオ・ベッチェイは、「人間の開発」に着目し、そこに希望を見出そうとしている。彼によれば、科学技術や工業の進歩は、地球上のすべてのものを多かれ少なかれ変えてしまう知識や方法を与えたが、未来の明確なビジョン、また知識や方法を人間と環境の改善に限り用いる叡知を与えてはくれなかった。しかし、進歩は止めることはできず、人類の唯一の頼みは人類の質と、全世界の構成員の質を高めることである。それによって、自らが解き放った技術という虎を乗りこなす方法を学び、機械ではなく人間が、明日の主役になることができる<sup>(13)</sup>。また次のようにのべている。「人類の衰退をとどめ、将来に備えるために必要とされる文化的、

---

(12) ローマ・クラブが発足したのは1968年のことである。アウレリオ・ベッチェイを中心に、「地球の有限性」という共通の問題意識を持ったヨーロッパの知識人10数人がローマで初会合を開いたのにちなんで「ローマ・クラブ」と名づけられた。

ローマ・クラブは、地球上で急速に深刻な問題となりつつある天然資源の枯渇化、公害による環境汚染の進行、発展途上国における爆発的な人口の増加、軍事技術の進歩による大規模な破壊力の脅威などによる人類の危機の接近に対し、可能な打開の道を真剣に探索し、これを世界の国々の指導者や一般大衆に警告、助言することを目的としている。これを、ベッチェイ会長の言葉で「自分たちの代はまだよいとしても、このまま世の中が推移すると、子や孫の代はとても幸せを手に出れない世界になってしまう。子や孫のために、何とか住みやすい未来を残したい」という願望から出発している。

ローマ・クラブは世界各国の学者、政治家、実業家等、各方面の人々が個人の資格で参加するインフォーマルな組織で、東および南の諸国を含む40数カ国にまたがる正会員は規約により100名以内に限定されてきた。また、発足の当初から「人類の危機プロジェクト」と称して、この現実世界に起こっているさまざまな問題を個別ではなく、相互に密接な関係を持つ問題群としてとらえ、その総合的な解決を世界の識者に呼びかけてきた。その最初の成果が「成長の限界」報告書であった（ローマ・クラブ福岡会議イン九州実行委員会事務局パンフレット「ローマ・クラブとその活動」1992年、1-3頁）。

(13) 「ローマ・クラブ福岡会議イン九州」実行委員会監修『ローマ・クラブ：今世紀の終わりに向けての備忘録』祥文社、1992年、39-41頁。

政治的、精神的発展を確かなものとするために、人類がたのむべきもっとも大切な宝は、遺伝的素質の一つとして人間に生来備わっている道徳的力と同様、理解力、洞察力、独創性といったまだ未開発の能力にあります。明日の世界を生きるに値するものとし、人類に未来を確保するための不可欠な条件として、これらの資源を開発しうるし、またそうしなければなりません。これこそ、人類が自らに課すべき新しい使命—終わりのない使命です。その根本原理は単純であり、同時に複雑でもあります<sup>(14)</sup>。さらにローマ・クラブがスポンサーである‘学習’プロジェクトによる一般の人々の理解力・実行力の向上をもとに、「実際、人間の潜在能力は、人類の最も素晴らしい資源です。そして、それは再生することができるだけでなく、広めることができ、至るところに存在するものです<sup>(15)</sup>」と。

ここにみられるように、ベッチェイによれば、人類の唯一の頼みは人類の質と、全世界の構成員の質を高めることである。人間の潜在能力は、人類の最も素晴らしい資源であり、その大切な宝はいまだ未開発であり、それを再生していくことこそこれから求められるものである。ここには、人間の持つ内的可能性への信頼があり、それこそこれまで最も開発されてこなかった資源であるという認識がある。その認識を持つことは極めて大切なことである。

## 2. デニス L. メドウズら<sup>(16)</sup>

デニス L. メドウズらによれば、成長に傾倒する文化の根底にある切迫し

---

(14) 同上書、39頁。

(15) 同上書、41頁。

(16) Meadows, D. H., Meadows, D. L., Randers, J. and Behrens III, W. W. (1972) *Limits to Growth*, Universe Books (ドネラ・H・メドウズ、デニス・L・メドウズ、ジャーガン・ランダース、ウィリアム・W・ベアランズ三世著、大来佐武郎監訳『成長の限界』ダイヤモンド社、1972年)。以下 Meadows, et al. [1] と記す。Meadows, D. H., Meadows, D. L. and Randers, J. (1992) *Beyond the Limits*, Chelsea Green Publishing Co. (ドネラ・H・メドウズ、デニス・L・メドウズ、ヨルゲン・ランダース

た問題——貧困、失業、満たされていない非物質的ニーズ（たとえば賞賛や尊敬）——に立ち向かうために、「現代に生きる世代は、エコロジカル・フットプリントを地球の限界以下に戻すだけではなく、自らの内的世界と外的世界を再構築することを求められている。これは、生活のあらゆる分野に及び、人間のあらゆる種類の才能を必要とする。技術革新や企業革新が必要であるとともに、地域や社会、政治、芸術、精神面での革新も求められる<sup>(17)</sup>」。

「工業世界を次の段階へ進化させなくてはならない、ということは、決して恐ろしいことではない。むしろ大きなチャンスである。このチャンスをつかみ、いかに持続可能で公正に機能させるかだけではなく、本当に望ましい世界にするかは、リーダーシップ、倫理、ビジョン、勇気次第である。それは、コンピュータ・モデルの特性ではなく、人間の心（heart）や魂（soul）の特性である<sup>(18)</sup>」。

またデニス・L・メドウズは、「際限のない物的拡張という目標を放棄する以

---

著、茅陽一監訳『限界を超えて』ダイヤモンド社、1992年）。以下 Meadows, et al. [2] と記す。Meadows, D. H., Randers, J. and Meadows, D. L. (2004) *Limits to Growth: The 30-Year Update*, Earthscan (ドネラ・H・メドウズ、デニス・L・メドウズ、ヨルゲン・ランダース著、枝廣淳子訳『成長の限界：人類の選択』ダイヤモンド社、2004年）。以下 Meadows, et al. [3] と記す、である。

(17) *Ibid.*, p. 262 (同上書, 334-335頁)。ここで、メドウズらは、ルイス・マンフォードによる50年前の次の文章を引用している。「拡大の時代は、いままさに均衡の時代に道を譲ろうとしている。この均衡を達成することは、今後数世紀にわたる事業となるだろう。新しい時代のテーマは武器と人でもなく、機械と人でもない。生命の復活、機械的なものから有機的なものへの移行、そして、あらゆる人間的な努力を意味する究極的な意味での人格の再建がテーマとなる。修養、人間性の賦与、協力、共生——これらが新しい世界をとりまく文化のスローガンとなる。変化は生活のあらゆる分野に現れる。企業の組織や都市計画、地域開発、世界資源の交換といった分野のみならず、教育の使命や科学の方法にも影響を与える」(Mumford, L. (1944) *The Condition of Man*, New York: Harcourt Brace Jovanovich, pp. 398-399)。この文章がすでに50年以上も前に書かれていたことに驚くと同時に、その内容に筆者も共感を覚える。

(18) Meadows, et al. [3] p. 263 (訳書, 335頁)。

地球環境問題解決のための鍵（中丸寛信）

外に、どんな技術をもってしても、どんな社会システムによっても、将来的に持続可能な社会をつくりだすことはできない。それにはまず個人ひとりひとりが、持続可能な社会という目標を設定して、自分自身の意識を変化させていくことだ<sup>(19)</sup>とのべ、1人ひとりの意識変革なしには持続可能な社会をつくりだせないとしている。

さらに彼は、『『持続可能な発展』という言葉をよく耳にしますが、資源枯渇により成長に限界が見えるなかで、それは達成可能でしょうか』という質問に答えて『『成長に限界がある』という時の『成長』は、エネルギー消費や物質的な拡大を意味します。米国の心理学者、マズローの欲求段階説では、こうした物質的な欲求は人の欲望の中では低い段階のものです。そして、産業のほとんどはこの低い段階の欲求に応えることで、利益を上げてきました。一方、心の安寧や自己実現など、より高い段階での欲求ではエネルギー消費や物質的な拡大を伴いません。産業がこうした欲求に応え、ビジネスにできれば、『成長の限界』のなかで、社会や産業は発展し続けられるはず<sup>(20)</sup>』とのべている。

メドウズらによれば、持続可能性革命は、何よりも人間性の最も悪い部分ではなく、最も良い部分を表し、育てることができる社会的変革でなければならない。自分の中にも誰の中にもある、人間としての最高の才能を見出し、信じること。地球規模のパートナーシップ精神を持って行わない限り、人類は持続可能なレベルまで人類のエコロジカル・フットプリントを減らすという冒険に勝利を収めることはできない。自分自身も他の人たちも、1つに統

---

(19) D. メドウズ「限界を超えた地球から持続可能な地球へ」松井孝典編『最後の選択：文明・人類はどこへ行くのか』徳間書店、1994年、180頁。

(20) 『『危機は2020年より前に到来』気候変動より深刻な資源枯渇』『日経エコロジー』2008年1月、17頁。なお、マズローの欲求段階説は、Maslow, A. H. (1954) *Motivation and Personality*, Harper & Row, pp. 80-106 (A. H. マズロー著、小口忠彦監訳『人間性の心理学』産業能率大学出版部、1971年、89-117頁) 参照。

合されたグローバル社会の一部であると見なすようにならない限り、崩壊は避けられない。そのためには思いやりの気持ちが必要である。それも、同時に自分のまわりにいる人たちだけではなく、遠くに暮らす人々や将来世代への思いやりが必要なのである。人類は、「未来世代に生き生きとした地球を残す<sup>(21)</sup>」という考えを大切にしなければならない。

このように、メドウズらは、私たち1人ひとりが心の安寧や自己実現など、より高い段階の欲求を引き出し生きること、「持続可能な発展」は可能であるとしている。

### 3. 梅原猛氏, 松井孝典氏, J. リフキン, E. F. シューマッハー

梅原猛氏は、現代文明が低次元の欲望に流されており、それを抑制し、昇華する必要性を指摘している。そのために、「いまどうしても21世紀を展望した新しい欲望抑制の哲学が必要になると私は思っています<sup>(22)</sup>」とのべている<sup>(23)</sup>。

「欲望絶対主義をどう変えていくのか、その羅針盤もなく、また四聖人（孔子、釈迦、ソクラテス、イエス・キリスト）以来の欲望否定論が力を失った

---

(21) Meadows, et al. [3] pp. 281-283 (訳書, 360-362頁)。

(22) 梅原猛, 松井孝典『地球の哲学: 46億年の歴史が語る新しい人間観』P H P 研究所, 1998年, 204頁。梅原氏の主張は、同著『共生と循環の哲学』小学館, 1996年も参照。

(23) ゼロエミッションを積極的に推進している三橋規宏氏も同様に、「もはや『人間の欲望は無限である』という前提ではやっていけません。『足るを知る』という新しい考え方を一人一人が身に付けることが必要です。地球の環境許容量や天然資源が有限であるのに、人間の欲望だけが無限に増え続ければやがて破綻は避けられません」(三橋規宏『環境再生と日本経済』岩波書店, 2004年, 10頁)。「破局を回避する道は実は明らかなのです。それは、私たちがずっと慣れ親しんできた一方通行型社会を支えてきた考え方, 見方, 価値観, 経済活動様式, ライフスタイルなどを思い切って転換させればよいのです。しかし過去からずっと引き継がれて来た考え方や生活習慣を根底から変えることはそう簡単なことではありません。それができるかどうか, いわば, 500万年に一度の価値観の大転換が私たち現代社会に問われているわけです」(同上書, 5頁)と記している。

地球環境問題解決のための鍵（中丸寛信）

ま、人類は次の世紀に突入しようとしている」<sup>(24)</sup>からである。

また、松井孝典氏は、欲望を抑える考え方として、「レンタル思想」という考え方を提起している。「これは欲望の具体的な形としての所有という概念を否定し、代わりにレンタル、つまり借り物という考え方に立つというこ<sup>(25)</sup>と」である。それは、地球システムのなかで人間圏が占有できる大きさは有限であることを前提条件としており、地球システムによる負のフィードバック作用を受けて、人間圏が崩壊してしまうことを避けるために総量規制の概念が前提となる。<sup>(26)</sup>また、松井氏は、D.メドウズとの対談の中で「現在の環境問題にどのように対応していくかは、非常に難しい問題が沢山あるわけですが、結局、最後のところで求められていることが何であるかがはっきりしないと、現実の対応が決まらないのではないかと、僕は思うんです。では、人間にとって何が究極の問題かといえば、『われわれは何のために生きているのか』というところまでいかざるを得ない。われわれはこの宇宙に何のために存在するのかと、そこまで突き詰めていかないと、従来の文明のシステムを変革するといっても、基本的なビジョンが出てこないのではないかと僕は考えています」<sup>(27)</sup>とのべ、さらに利根川進氏との対談の中では「人間を知り、地球を知り、宇宙を知り、生命を知りということをやらないと、人類としての新しい生き方も出てこないのではないですか」<sup>(28)</sup>とものべている。

現代アメリカを代表する文明批評家であり、カーター大統領の経済および未来科学計画のブレーンとして参画したジェレミー・リフキンも同じ問題意識を次のようにのべている。「E. F. シューマッハーは1997年、アメリカ国内

---

(24) 梅原猛、松井孝典、前掲書、204頁。

(25) 同上書、204頁。

(26) 同上書、217-220頁。なお、松井氏の主張は、同編『地球学：長寿命型の文明論』ウェッジ、1998年；同編『地球倫理へ』岩波書店、1995年も参照。

(27) 松井孝典編『最後の選択』195頁。

(28) 同上書、288頁。

の講演旅行で、「現在および今後も、最も緊急を要する課題は『人間とは何か?』『人間はどこから来たのか?』そして『生きる目的とは何か?』といった問題について、根元的な洞察を行ない、その答えを明確に見極めることである」と述べている。これこそ人間が生きていくうえでの大問題であり、何千年も前から、われわれはこの問題の虜になってきた。もっとも、今では大きく論じられることはないし、また、ニュートンの世界観の影響のせいか、“科学以前”の問題であるとして、ないがしろにする人が大勢いるありさまである。とはいえ、この大問題がこの先、われわれを待ち受けている低エントロピーの世界に、再び登場してくることは間違いない<sup>(29)</sup>」と。

私たちが低次元の欲望に流されることを抑制し、昇華するためには、ここにみられる「人間とは何か」「人間は何のために生まれ、生きているのか」「人間はどこから来て、どこへいくのか」といった人間そのもの、さらに人生や世界に対する根源的な問いが究明される必要がある。それらの問いは、これまで人類が幾千年も前から追求してきた問いであり、それに答えることは容易なことではない。しかし、事態が切迫している今日、その問いを看過することはできないと思われる。

以上の論者の主張から、地球環境問題解決のためにこれから私たちが向かうべき方向は、1人ひとりの内なるエネルギーを開発し、その次元を高めることにある。それは、米国の心理学者 A. H. マズローの自己実現論につながっており、また今日、欲望を抑制し昇華することを可能にするために、人間

---

(29) Rifkin, J. (1990) *Entropy*, The Viking Penguin Inc. (J. リフキン著、竹内均訳『改訂新版・エントロピーの法則』祥伝社、1990年、257頁)。リフキンの著作には、Rifkin, J. (1991) *Biosphere Politics*, Crown Publishers, Inc. (J. リフキン著、星川淳訳『地球意識革命』ダイヤモンド社、1993年、257頁)もある。なお、E. F. シューマッハーの考え方については、同著、小島慶三、酒井懋訳『スモール・イズ・ビューティフル』講談社、1986年参照。

地球環境問題解決のための鍵（中丸寛信）

や世界に対する根源的な究明が求められている。そこで続いて、マズローの自己実現論、および、「自己実現」について論じているノルウェーの哲学者アルネ・ネスの主張についてもみていきたい。

## Ⅳ 自己実現論について

### 1. A. H. マズローの自己実現論<sup>(30)</sup>

心理学者の A. H. マズローの研究における中心テーマは、精神的に健康で自己実現しつつある人間についての研究であるといわれている。マズローが、自分の著作を深く理解してくれる数少ない個人であると信じていたヘンリー・ガイガーによると、マズローが「いいかったことは、『自己実現する人々が、広い範囲の状況、困難、対立に際して、このように行動し、反応するのだ』ということであり、そして、そのような研究の心理学的（教育的）重要性を示すことであった<sup>(31)</sup>」。マズローは、自己実現的人間の特徴について、まず『人間性の心理学』においては次のようにまとめている。①現実をより有効に知覚し、それと快適な関係を保つこと、②受容（自己、他者、自然）、

---

(30) マズローの心理学研究で著名な上田吉一氏は、マズローの心理学をおよそ3つの時期に分けてとらえている。第1の時期は、動物や人間の動機に関するものが中心を占めている1930年代から1940年代終りまでの20年間で、この時期の研究を集大成したものは、Maslow, A. H. (1954) *op. cit.* (A. H. マズロー著、小口忠彦監訳『人間性の心理学』)である。第2の時期は、健康な人間、自己実現する人間を対象に健康心理学の体系を唱導した1950年代の10年間で、この時期の研究を集大成したものは、Maslow, A. H. (1962) *Toward a Psychology of Being*, D. Van Nostrand (A. H. マズロー著、上田吉一訳『完全なる人間』誠信書房、1964年)である。第3の時期は、心理学的健康の問題から、至高経験の問題へ、さらに存在の問題、超越の問題へと思想を展開し、人間の最高価値を究明しようとした1960年代で、この時期の著書・論文を総合的にまとめあげたものは、Maslow, A. H. (1971) *The Farther Reaches of Human Nature*, Viking Press (A. H. マズロー著、上田吉一訳『人間性の最高価値』誠信書房、1973年)である（同上書、472-474頁）。したがって、ここでのマズローの理論の把握は、主として上記3つの著作によっている。以下、それらを各々 Maslow [1], Maslow [2], Maslow [3] と記す。

(31) Maslow [3] p. x vii（訳書、v 頁）。



③自発性, ④問題中心的, ⑤超越性——プライバシーの欲求, ⑥自律性——文化と環境からの独立, ⑦評価が絶えず新鮮であること, ⑧神秘的経験——大洋感情, ⑨共同社会感情, ⑩深遠な対人関係, ⑪民主的性格構造, ⑫手段と目的との区別, ⑬哲学的で悪意のないユーモアのセンス, ⑭創造性, ⑮文化に組み込まれることに対する抵抗, ⑯様々な欠点を多くもっている, ⑰価値体系の確固たる基盤をもっている, ⑱二分性の統合<sup>(32)</sup>。

また、『完全なる人間』においては、健康な、手本となる人間の、客観的に記述することも測定することもできる特徴として、①明快で有効な現実認知, ②経験に一層よく開かれていること, ③人格の統合性, 全体性, 結合の増大, ④自発性, 表現性の増大, 完全な機能, 活力, ⑤ありのままの自己, 確たる同一性, 自立性, 独自性, ⑥自己の客観性, 分離, 超越の増大, ⑦創造性の回復, ⑧具体性と抽象性を融合する能力, ⑨民主的性格構造, ⑩愛する能力などをあげている。<sup>(33)</sup>

さらに『人間性の最高価値』においては、①正義をもたらすことを喜ぶ, ②残虐な行為と搾取を阻止することを喜ぶ, ③嘘や虚構と戦う, など合わせて40の特徴を列挙している。<sup>(34)</sup>

以上のことから明らかなように、マズローが示した『『個々の』特徴は、すべて実際には別々のものではなく、たがいにいろいろのかたちで共有せられている……。たとえば、重複しあったり、同じことがらを違ったかたちで述べたり、同じ意味を比喩的にとったりなどしているのである<sup>(35)</sup>。その意味で、「論ぜられるそれぞれの『側面』は、他のそれぞれの『側面』の部分的説明と考えることができる<sup>(36)</sup>」。

---

(32) Maslow [1] pp. 203-234 (訳書, 228-263頁)。

(33) Maslow [2] p. 157 (訳書, 210頁)。

(34) Maslow [3] pp. 308-309 (訳書, 362-365頁)。

(35) Maslow [2] pp. 103-104 (訳書, 146頁)。

(36) *Ibid.*, p. 104 (訳書, 146頁)。

V. E. フランクルによれば、A. H. マズローの如く、自己実現を「究極の動機」として指摘することには誤りがある。その誤りとは、世界とその目的を、目的に対する単なる手段となし、その価値を低下させてしまうことにある。私たちは、人の第1義的意向または究極的目的でさえも、自己実現という言葉によって正確には説明しえない。自己実現とは結果の問題であって意向の対象とはなりえない。認識は単なる自己実現の度合に反して、また自己超越をもつ程度に比例して真の認識となる。さらに正しい人間観は、それが自己実現理論を超えるとき正しく形成されうるとフランクルは主張している<sup>(37)</sup>。

もちろん、マズローにおいても、第1期の著作『人間性の心理学』の自己実現理論にとどまっていたわけではない。それ以降さらに深め、第3期の著作『人間性の最高価値』では自己実現する人々を2種類に区別している。それらは、まず明らかに健康であるが超越経験をほとんどあるいは全くもたない人々であり、他は超越経験をもっている人々である。そこでは、自己実現する人のみが超越するのではなく、不健全で自己実現できない人も重要な超越経験をしていることを付言している。

前者に関してはD. マグレガーのY理論<sup>(38)</sup>が合致しているが、後者に関してはY理論にあてはまるばかりかそれを超越している。マズローは後者に関して、X理論やY理論と同一の連続線上にありながら、それらとひとつの階層組織を形作っているということでZ理論と呼んだ<sup>(39)</sup>。さらに、超越的でない自

---

(37) Frankl, V. E. (1967) *Psychotherapy and Existentialism*, Washington Square Press (V. E. フランクル著、高島博、長沢順治訳『現代人の病』丸善、1972年、58-65頁参照)。

(38) D. マグレガーのX理論やY理論については、McGregor, D. (1960) *Human Side of Enterprise*, McGraw-Hill (D. マグレガー著、高橋達男訳『企業の人間的側面』産業能率大学出版部、1966年)を参照。

(39) マズローのZ理論をマグレガーのX理論やY理論と対比しながら検討した論文に、河野昭三「社会・企業（組織）・個人の統合に向けて」甲南大学経営学会編『経営学の伝統と革新』千倉書房、2010年、71-85頁がある。

己実現者は、次にあげる性質をもっていないかあるいは超越者ほど多くもっていないとして、超越者の特性を説明している。

- ・超越者にとって至高経験は人生の最も重要な一面となっている。
- ・容易に、また正常かつ自然な調子で、無意識的に、存在の言語（B言語、永遠の相のもとにおける次元で生きている人々の言語）を話す。
- ・認知は統合的で神聖である。
- ・意識的に高次欲求に動機づけられるところが大きい。
- ・初対面においてさえお互いを認め合い、ほとんど出会った瞬間から親密になり相互に理解しあう。
- ・すべての事柄を美化する傾向がある。
- ・健康な自己実現者よりも世界を全体的にみており、人類はひとつ宇宙もひとつととらえている。
- ・精神的、人間関係的、文化的、国際的な共働（synergy）への傾向をもつ。
- ・自我・自己・アイデンティティを超越している。
- ・畏敬の念を起こさせ、神のような、「聖者のような」敬うべき、「おそれおい」「偉大な」感じを多く与える。
- ・健康な自己実現者よりも改革者、発見者になることが多い。
- ・一段と高い次元の「幸福」を経験すると同時に、人間の愚かさなどからもたらされる宇宙的な悲しみをもつ。
- ・劣っている人間に対して、家族的な愛と同時に厳しさをあわせもつ。
- ・知識の増加と、神秘性や畏怖の増加の間に顕著な相関がみられる。
- ・奇人や変人を恐れず、創造的な人々を選び出すことにかけてすぐれている。
- ・全体的意味において、悪の必然性や必要性を理解しており、また必要とあれば悪人をあわれみをもって殴り倒すこともできる。
- ・自分自身を才能の運搬者、超人的なものを伝達する道具とみなす傾向が強い。

- ・非常に「宗教的」であり「精神的」である。
- ・自我・自己・アイデンティティを容易に超越し、自己実現以上に進むことができる。
- ・ささいな、とるにたらない物事に心を奪われることが多い。
- ・道教的な傾向をもつ。
- ・全面的な、心の底からの葛藤のない愛情、受容、豊かな表現をもつ。
- ・至高経験や認知を可能にしやすい仕事を積極的に求める。
- ・健康な自己実現者が W. H. シェルドンの中胚葉型であることが多いのに対して、超越者はやや外胚葉型の傾向がある。

以上が超越者の特性であるが、それらをみることによって Z 理論にもとづく人間観は、第 1 期の自己実現論を超えたものになっていることがわかる。

## 2. アルネ・ネスの「自己実現」

ネスは1987年の「自己実現」についての講演記録の中で、その要旨を次の<sup>(40)</sup>6点にまとめている。

- ①人間は自分の持つ可能性を過小に評価している。
- ②人間は、すべての重要な関係においてバランスのとれた成長をとげると、自己をあらゆる生命存在と——美醜、大小、知覚能力にかかわらず——「同一視」せざるをえないようにできている。
- ③自己の成熟は3つの段階を経て完成されるものと以前から考えられてきた。

---

(40) Drengson, A. and Inoue, Y. (eds.) (1995) *The Deep Ecology Movement*, North Atlantic Books, Berkeley, California, pp. 13-14 (アラン・ドレングソン、井上有一編、井上有一監訳『ディープ・エコロジー』昭和堂、2001年、45-48頁)。なお、ネスの講演録は、Naess, A. (1987) "Self-Realization: An Ecological Approach to Being in the World", *The Trumpeter*, Vol. 4, No. 3, pp. 35-42 にあるが、これは、Drengson, A. and Inoue, Y. (eds.), *op. cit.*, pp. 13-30 (訳書、45-74頁) に再録されている。ここではそれを参照している。

自我から自我を包み込む社会的自己が育ち、さらにその社会的自己を包み込む形而上学的自己（エコロジカルな自己）が育つというものである。ここではエコロジカルな自己という概念をしばらく使っておきたい。

- ④自己実現が進むにつれ、生のよろこびや意味も深まっていく。そのかたちはさまざまであるが、自己実現が進むとは、自己が広がり、また深みを増すことをいう。
- ⑤人間の成長に応じ自己と他の存在との同一視・同一化がかならず起こり、それゆえ自己が広がり、またその深みが増す。
- ⑥今日のきわめて大きな課題として、この地球をこれ以上の破壊から救うということがある。これ以上の破壊が進めば、人間と人間以外の存在の双方にとってよい意味での自己の利益がさらに実現できなくなり、すべての存在にとり喜びに満ちた生の可能性が狭められる。

また、ネスは、「自己実現」を一言で「それぞれが固有に持つ可能性を実現すること」<sup>(41)</sup>とも表現している。なお、ネスのいう自己実現の概念は決して利己的欲求ではない。「今日では、自己実現、自己成就といった語は、常に生涯にわたる利己的欲求を満たす努力に結びついたかたちで使われている」<sup>(42)</sup>。しかし「自己実現を利己的欲求の実現と同じものと考えるなら、自分たち自身の『自己』の価値や可能性を著しく過小評価することになることも、伝えなくてはならない。“人間はあなたが思っているよりはるかに偉大で、深みがあり、慈愛心に富み、尊厳や喜びを持ちうる存在なのです。競争に打ち勝つようなものではない豊かな喜びに、手を伸ばせば届くのです”<sup>(43)</sup>」とのべ、今日一般的に用いられている「自己実現」とは明確に区別するために「拡大された自己」<sup>(44)</sup>の考え方を紹介している。

---

(41) *Ibid.*, p. 18 (同上書, 53頁)。

(42) *Ibid.*, pp. 24-25 (同上書, 65頁)。

(43) *Ibid.*, p. 25 (同上書, 65頁)。

さらにネスによれば、人間が単なる義務感や道徳心から他者を愛することのできる度合いは、残念ながら極めて限られたものである。にもかかわらず、不幸なことに、環境保護主義が道徳や倫理を広く説いた結果、一般の人々は、より我慢し、責任ある態度を示し、より関心を持ち、道徳的な行動をとるよう、犠牲を強いられるような誤った印象を持つようになった、と今日の環境保護主義の限界を指摘している。そして、今後の環境保全運動の活性化のためには、環境倫理（environmental ethics）に対して環境存在論（environmental ontology）や現実主義（realism）に優位性をもたせることが必要としている。

ネスによれば、環境問題においては、基本的に一般の人々に道徳を説くのではなく、人々の本心に働きかけることである。また、生命の豊かさや多様性、手つかずの自然景観に対する感性を磨くことにより、数えきれないほどさまざまな喜びの対象を見出していくことこそが必要である。「自己」が広がり深まれば、必要な「いつくしみ」の姿勢は自然に生じる。原生自然の保護も自らの自己の保護と見なされ、そう実感されるからである。

すなわち、もしエコロジカルな自己が現実を経験することになれば、私たちの行動は、“自ずから”美しく、厳しい環境倫理に沿ったものになる。確かに私たちは折にふれ倫理的に足りないところを指摘される必要がある。しかし、励ましや、現実や自分自身についてのより深い認識により、私たちはより容易に変わりうる。<sup>(45)</sup>

---

(44) 概念的には、ネスは「自己（セルフ）」を小文字で始まる「self」と大文字で始まる「Self」に区別して用い、幼児の狭い自我を示す個人主義的で功利主義的な「self」（自我的「自己」、偏狭な「自己」）から包括的であらゆる生命との深い一体化へと成熟した「Self」（拡大された「自己」、エコロジカルな「自己」）への深化を目指すこと、そのための条件を整備することを提唱している（Naess, A. (1989) *Ecology, Community and Lifestyle*, Translated and revised by D. Rothenberg, Cambridge University Press, pp. 83-86（アルネ・ネス著、齊藤直輔、開龍美訳『ディープ・エコロジーとは何か』文化書房博文社、1997年、136-140頁））。

そこで、ネスに従えば「最も自然なかたちでそれぞれの“自己”を広げ深めることのできる条件が何なのかを見きわめ、その条件を整えることに、人間はもっと力を尽くすべき<sup>(46)</sup>」である。またそれは「コミュニティの科学というよりも、コミュニティのセラピーの問題である。最も広い意味でのコミュニティに対するわれわれの<sup>(47)</sup>関係の治療 (healing) の問題」である。

最後にネスの心にあるビジョンを紹介したい。「ただでさえ豊かな現実が、人間の持つ他にない資質により、さらに豊かになっていく。他のすべての生命存在と親密な関係をもって生きていくことのできる可能性をもつ生命存在としては、わたしの知るかぎり人間が唯一のものである。このすべての可能性が、ごく近い未来にはいわないまでも、そのうちいつかは実現されてほしいものである<sup>(48)</sup>」。

まさにネスの自己実現論は、通常使われている「自己実現」と区別し、「拡大された自己実現」という概念を提示し、人間の「自己」の可能性に対する信頼とその実現を志向している。また、人間の本心に働きかけることによって、その本来的な偉大さ、慈愛深さ、尊厳さ、自然に対する豊かな感性などを磨くこと、それによって自ずからなる自然保護を提唱しているのである。

ここではマズローの自己実現論、ネスの「自己実現」についてみてきたが、それでは「自己実現」のために、これまでどのような方法が示されてきたの

---

(45) *Ibid.*, pp. 25-27 (同上書, 65-68頁)。

(46) *Ibid.*, p. 25 (同上書, 66頁)。

(47) *Ibid.*, p. 27 (同上書, 68頁)。その詳細は、Naess, A. (1989), *op. cit.* の中で、エコソフィと、科学技術・ライフスタイル・経済学と政治とをそれぞれ結びつけながら論じている。

(48) Drengson, A. and Inoue, Y. (eds.), *op. cit.*, p. 30 (アラン・ドレングソン, 井上有一共編, 前掲書, 73頁)。

であろうか。それについて試いてみよう。

## V 自己実現の方法

心理学の研究者たちはこれまで心（意識）について究明し、自己実現や自己完成の概念に焦点してきた。<sup>(49)</sup> そのうちの一人である A. H. マズローは、「自己実現とは何か」などについて研究し、自己実現に向かうための行動や手順を次のように8項目にわたって提示している。<sup>(50)</sup>

- ①自己意識や自己知覚を少なくし、無欲に生きること。
- ②人生をつぎからつぎへと選択する過程と考え、恐れのかわりに成長への選択をすること。
- ③衝動の声（自己の内部の声）に耳を傾けながら行動し、反応すること。
- ④迷ったときには、嘘をつくよりもむしろ正直になって責任をもつこと。
- ⑤引込み思案になるより、勇敢になること。
- ⑥自分のやりたいことを上手にやりとげるために働くこと。
- ⑦幻想をこわし、誤った考え方を除去し、自分の不得手なものを知り、自分の才能の中にあるものを知ること。
- ⑧自分自身に、自分を開くこと。

以上の8項目を要約すれば、「抑圧をつき崩し、自己を知り、衝動の声を聞き、素晴らしい本性を解放し、知識や洞察や真理に到達すること——これ

---

(49) F. ハーズバーグによれば、「自己実現ないしは自己完成の概念が多数のパーソナリティ学者の思考の焦点になっていることは確かである。たとえば、ユング、アドラー、ロジャース、ゴルツシュタイン、マズロー、ガードナーのような人たちによれば、人間の最高目標は、みずからの生得潜在能力に応じて、現実のわくのなかで、創造的でユニークな個人に仕上がることでありといわれる。このような目標からそれるとき、かれはユングのいう『かたわの動物』になる」(Herzberg, F. (1966) *Work and the Nature of Man*, World Publishing Company, p. 56 (F. ハーズバーグ著、北野利信訳『仕事と人間性』東洋経済新報社、1968年、65頁))。

(50) Maslow [3] p. 43 (訳書、54頁)。



らのものこそ求められるものである<sup>(51)</sup>」となる。

マズローの自己実現の方法は、大切な生き方の指針を与えているといえよう。しかし、それによって一瞬一瞬動く心を見つめ、つかみ、変革することは難しいと思われる。

これまでマズローの自己実現的人間の特徴についてみてきたが、同時に彼は、「自己実現というのは、定義するのが難しい。自己実現のかなたは? という質問に答えるのが、どれだけ難しいか。また、真実のかなたには何があるのか、という質問についても同様である。まさに正直であるということは、結局、こういったことすべてに関しては、十分でない<sup>(52)</sup>」とのべ、彼が究明しようとしたテーマ——人間はどれだけ成長できるのか、また何になることができるのか——に答えることが極めて困難であることを表明している。

またマズローによれば、人間はそれぞれ自己のうちに2組の力をもっている。「1組は、恐れから安全や防衛にしがみつ き、とすると退行し、過去にたより、母親の腹や乳房との原初的な結びつきから脱け出すことを恐れ、偶然の機会をとらえることを恐れ、すでに所有するものを危険にさらすことを恐れ、独立、自由、分離を恐れる。他の組の力は、自己の全体性や自己の独立性へ、その人の全能力の完全な働きへ、最も深い現実の無意識的自己を受け容れると同時に、外界に対してもつ確信へと人を促すのである<sup>(53)</sup>」。同時に、「人類は原理的にいって誰でも善良で健康な人になりうるが故に希望を持つことができる。しかしまた、実際には非常にわずかな人だけが善良な人になっているので悲観せざるをえないのである<sup>(54)</sup>」とのべ、前者から脱して後者の方向に生きることの困難さを指摘している。

(51) *Ibid.*, p. 52 (訳書, 66-67頁)。

(52) Maslow [3] p. 43 (訳書, 54頁)。

(53) Maslow [2] p. 46 (訳書, 72-73頁)。

(54) *Ibid.*, p. 163 (訳書, 218頁)。

またF. ハーズバーグは、それまでの自己実現の概念を土台としながら、新たに精神的成長に関連した基準を次のように6項目にわたって提示している。<sup>(55)</sup>

- ①より多く知ること。
- ②知識内の関係づけが増えること。
- ③創造性——新しい知識や原理を生み出すこと。
- ④曖昧さの中での効率——不確実性に耐え、変化と更新を受け入れ、複雑化に対処することは、成長過程における最大の挑戦である。
- ⑤個別化——未分化の感覚と行動のかたまりから、分離した個別の感覚と行動の領域への進行。
- ⑥現実的成長——錯覚と現実との区別。空想を現実から切り離し、それが気晴らしだけに使うべき虚構であることを心に銘じること。自分が何者であるかを知り、まわりとの関わりで身につけているかの如く見えるもの——たとえば地位、名誉、所有物、他人の栄光の照り返しを浴びることなど——によって、それらがあたかも自分自身の成長であるかの如く錯覚しないこと。

ハーズバーグによると、以上のプロセスを経ながら、人間は低次から高次へと精神的成長を歩み、自らの生得潜在能力に応じて、現実の枠の中で、創造的でユニークな個人に仕上がっていく。そのプロセスが人間の完全性へのプロセスということになる。

ハーズバーグが示した精神的成長の基準は、人間が成長していくプロセスを示しており、大きな意味があるといえよう。しかし、それらの基準をもとに、自分の心を見つめ、変革していくことは難しいと思われる。

---

(55) Herzberg, F., *op. cit.*, pp. 57-70（訳書、67-82頁）。

ここではマズローの「自己実現の方法」、ハーズバーグの「精神的成長の基準」などについてみてきたが、それらが「内なるエネルギーの開発」に大きな力を発揮できるとは思えない。

## VI 今後に向けて

これまで地球環境問題をはじめ様々な問題が押し寄せている今日、それらを解決するための鍵はないのであろうかという問題意識のもとに、著名な論者の主張を踏まえながら、その鍵について若干検討してきた。それによって、その鍵が「内なるエネルギーの開発」にあることは多くの論者によって指摘されているが、現時点ではそのための明確な方法が示されているとはいえないといえよう。

そこで今日、誰もが理解でき、日々の生活において、いつでも、どこでもチャレンジできる「内なるエネルギーの開発のための真実の方法」が求められているといえよう。

同時に、前述のごとく、私たち1人ひとりの欲望の抑制・昇華の必要性や必然性へと導く「真実に基づく理論体系」が必要とされている。

それらが明らかに示され、広く周知されるようになれば、多くの人々が内なるエネルギーを引き出し、マズローのいう自己超越、ネスのいう「拡大された自己」へと次元を高めていくことができるようになるであろう。それが地球環境問題の解決へとつながっていくと思われる。

それにしても、これまでの心理学をはじめとする私を知る限りの文献には、そのような理論やメソッド（方法）を提示したものは見当たらなかった。唯一、高橋佳子氏によって提示されているTL人間学（「魂の学」）の中に非常に精緻な理論体系や、内なるエネルギーの開発のための具体的・実践的方法（メソッド）があった。<sup>(56)</sup>それを学び、実践することで、内なるエネルギーが開発されていくに違いない。<sup>(57)</sup>

それと同時に、多くのすぐれた研究者や NPO などによって提唱されてきたネットワークやシステム、仕組みなどを構築していくこと<sup>(58)</sup>。それによって、問題を解決していくことが21世紀には必要不可欠であると思われる。

---

(56) T L 人間学（「魂の学」）には、たとえば内なるエネルギーの開発に大きな力を発揮する「ソウル・コンパス」（魂羅針盤）といわれるものをはじめ、様々な実践的方法（メソッド）がある（詳細は同著『運命の方程式を解く本』三宝出版、2007年、268-269頁）。その他、高橋佳子氏の著作には、『サイレントコーリング』三宝出版、1991年；同著『新しい力』三宝出版、2001年；同著『Calling: 試練は呼びかける』三宝出版、2009年；同著『魂の冒険』三宝出版、2010年、など多数ある。

(57) 実際にT L 人間学（「魂の学」）を学び、実践することによって、内なるエネルギーが開発され、①心と身体が元気になってきた、②試練の受けとめ方が変わってきた、③困難に強くなった、④毎日が生き生きと楽しくなってきた、⑤人間関係が良くなってきた（苦手な人と仲良くなってきた）、⑥新しい関わりや出会いに恵まれるようになった、⑦新たな人生の兆しが現れてきた、⑧新しい現実を開く力が与えられてきた、といった人の事例が数多くみられる（高橋佳子、前掲書など参照）。また、経営、医療、教育などの専門分野に属する人の実践事例も報告されている（トータルライフ総合事務局編『創世潮流 No. 1』トータルライフ総合事務局、2001年10月；同『創世潮流 No. 2』2002年4月；同『創世潮流 No. 3』2002年11月；同『創世潮流 No. 4』2003年8月など参照）。そこでは、1人ひとりの内なるエネルギーの開発と様々な問題解決が同時になされていくことが実証されている。

(58) たとえば環境科学技術の最先端研究を紹介したものに、嘉門雅史他編『京都大学における環境科学技術分野への取組』京都大学研究推進部、2008年4月、があるが、そこにはすぐれた研究がみられる。